

桂林莊雜詠諸生示（その三）

広瀬淡窓

幾人いくにん 笈きやくをお負おううてて 西東せいとうよりす

両筑りやうちく双肥そうひ 前後ぜんごの豊ほう

花影かえい 簾れん満みちてて 春昼しゅんちゆう永ながく

書声しよせい断続だんぞくしてして 房櫓ぼうろうにに響ひびく

【作者】広瀬淡窓（一七八二～一八五六年）（天明二年～安政三年）江戸後期の儒学者。初めの名は簡、後に建と改めた。豊後日田の生まれ。二十歳の時、日田に塾舎桂林莊をつくり子弟を教育、三十六歳の時、塾生の増加により堀田村に移り咸宜園（かんぎえん）と言った。門人四千余人の中から多方面に人材を輩出、幕府は育英の功を賞し士籍に列し、苗字帯刀を許した。安政三年没、年七十四歳。

著書に「約言」「迂言」「義府」「析玄」「遠思楼詩鈔」「淡窓詩話」などがある。

【語釈】* 幾人…数えきれぬほど多くの人々。 * 負笈…郷里を出て遊学すること。両筑…筑前と筑後と。現在の福岡県西北部と南部に当たる。

* 双肥…肥前と肥後と。現在の佐賀県と、長崎県の杵岐、対馬を除く区域。肥後は現在の熊本県に当たる。 * 前後豊…豊前と豊後と。現在の大分県北部と福岡県東部が豊前であり、大分県南部が豊後である。

* 房櫓…房室の窓。れんじ窓や格子窓。読書の声が窓外にまで響くこと。

【通釈】ここ桂林莊の塾生になろうとして諸方から集まって来た者の数は、数えきれぬほど多い。また、出身地も、筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後と多岐にわたっている。それら多くの塾生たちが、簾いっぱいに梅花の影のうつる、うららかな春の日の昼さがりにも勉学に励んで倦むことを知らず、読書の声があるいは高くあるいは低く、窓外に響いている。